

平成 26 年度事業 外部評価結果報告書

東京都写真美術館外部評価委員会

平成 27 年 6 月 25 日

目 次

1	座長あいさつ	1
2	総 評	2
3	評点一覧	4
4	評価結果一覧	5

座長あいさつ

この度、東京都写真美術館外部評価委員会として平成26年度の東京都写真美術館の運営に対する評価結果を、福原義春館長に提出しました。

東京都写真美術館は年度後半に休館に入りましたが、東京都写真美術館の1年間の活動の評価を行いました。

評価に当たっては、「作品収集、作品管理、調査研究」においては、館で立てた収集指針に基づき、計画的な収集が進むとともに、作品管理が的確に行われていること、「展覧会」では、収蔵展・自主企画展ともに充実し、多彩なテーマで質の高い展覧会を数多く開催していること、7年連続で目標を上回る来館者を迎えたこと、「教育普及」の面では、小学生から大人まで幅広く、様々なプログラムが提供されていることなどに着目しました。また、美術館の活動に財政面で寄与する「支援会員」については、休館に入ったにも関わらず、良好な結果を残した点を高く評価しました。

一方、インターネット等を用いた情報発信や英語による情報提供の充実、画像の見られるコレクション検索の充実、さらには、美術館へのアクセス表示、カフェ、ショップなどの良質なサービスの提供について、さらなる取組を強化していただきたい課題もあります。

今回の改修にあたり建物のハード面での使いにくさが改善され、誰もが入ってみたいくなるような親しみやすい美術館となるよう私たちも、大きな期待を寄せております。

当委員会では、今回の評価が東京都写真美術館の今後の事業運営の改善、発展の一助となるよう各委員から寄せられた提言、課題等に着実、迅速に取り組まれるよう期待するものです。

平成27年6月25日

東京都写真美術館外部評価委員会

座長 樺山 紘一

【総評】

平成26年度の美術館運営について、まず、「優れた写真・映像作品の計画的・効果的な収集」であるが、写真美術館では基本方針及び収集指針が明確に立てられており、これら方針・指針に基づく収集が適切に行われている。特に、新規重点作家の「佐藤時啓」展は平成26年度（第65回）芸術選奨文部科学大臣賞を受賞、その質の高さをよく表し、展覧会と連動した効果的な収集が行われている。

次に「的確な作品管理」であるが、26年度は改修工事のための作品移動に伴うリスクを最小限に留める工夫がなされ、写真の総合専門美術館としての専門性を発揮した対応がなされた。

「調査・研究」面においては、展覧会図録や紀要の執筆のみならず、他誌への寄稿、学会発表、写真関係の講演会への参加・発表など、学芸員の専門性を高める調査・研究活動に積極的に取り組んでいることは高く評価できる。

「展覧会」では、収蔵展と自主企画展としてあわせて6件の展覧会が開催されたが、いずれも十分な準備がほどこされ、所期の目標を達成したと思われる。

なかでも、日本写真史の先駆者を明るみにした「下岡蓮杖」展、山岳写真の開拓者の作品を集中的に展示し、日本の近代がもたらした新しい自然観の一側面を示した「黒部と槍」展、「新規重点作家」の収集・調査の結果をもとに、写真展としての水準を示した「佐藤時啓」展、周到な準備のうえで開催された「岡村昭彦」展は、写真美術館としての力量を示したものと言える。

「映画の誘致と上映」については、特に20世紀初頭に遡る作品から現在まで、16点の作品が上映された「山岳映画特集」が注目される。こうした展覧会と映像とのコラボレーションが望ましく、今後の方向性を示唆する試みとして高く評価する。

「普及教育活動」では、スクールプログラムにおけるフォトグラムやモノクロの銀塩プリントの現像体験は、かつての時代の写真体験をもたぬ世代の青少年にとっては、物珍しいばかりか写真の原点を指し示すことの意味も大きい。

「図書資料」については、写真専門の図書室として収蔵冊数をさらに増やし、一般のみならず研究者にも活用できる水準の高い図書室を目指すことを希望する。クラウド版の図書システム導入により、インターネット上で雑誌の検索も可能になり評価できる。

「広報宣伝」においては、従来型広報誌「写真美術館ニュース eyes（アイズ）」、より広範な読者層に訴える「nya-eyes（ニヤイズ）」、プレスリリース、ポスター、チラシ以外にも、その他個々の広報も明確な対象者を想定し、効果的に展開している。

改修工事による休館も広報の重要な一環と捉え、クロージングイベントを実施する

館はあまり無いように思われるなか、クロージングイベントを行ったのは大いに評価に値すると思う。

また、「インターネット等を用いた情報発信」について、ホームページはそれなりに努力していると思うが、改善の余地があると思われる。

特に、コレクション検索の充実は単なる情報発信以前の問題であり、写真美術館は、日本におけるこの分野の leading museum であるからこそ厳しい注文をするが、全収蔵作品の戸籍をきちんと作って公表するという基礎作業がおろそかになっているのではないか。

文字データだけで画像が添付されていないのは致命的で、リニューアル後も著作権を取得しながら画像の添付を進めてもらいたい。

「来館者サービス」の面では、展覧会やイベントのみならず、図書室、カフェ、ショップにいたるまで、来館者に対してサービスを提供するという意識が徹底しているのは好ましい。

「企業・団体等の参加促進」については、支援会員に写真関連、印刷関連等、写美の性格と関連深い企業・団体がベースとしてあるのが心強い。

「ボランティアの参画促進」については、写美の場合、殊な技術に精通している人から、子ども相手に簡単なカメラを作る人まで多様なボランティアが必要とされるだろう。特に、写美のボランティアに応募する人は写真の好きな人だろうから、その気持ちが若い人、若い人に伝わってゆくと良い。

また、「地域との連携強化」については、恵比寿映像祭で地域連携が強化されたのは、高く評価できる。美術館を核に恵比寿を「写真と映像のまち」にするくらいの勢いがあってもいいかもしれない。

「インフラ」面では、改修内容も様々な検討がおこなわれたようであるので、リニューアルオープン後にその成果を見るのが楽しみである。

一度大規模改修が済めば次の機会は遠い。くれぐれも関わるすべての人々が当事者意識をもって、学芸の仕事の施設だけではなく、公共の施設のの一つ一つの計画について慎重かつ大胆な案を練り上げていただきたい。

平成26年度事業 評点表

評価項目		評点
1 作品収集・保存事業の評価 <過去から現在に至る写真・映像文化を未来に継承する美術館>		5
(1)	優れた写真・映像作品の計画的・効果的な収集	4
(2)	的確な作品管理	5
(3)	写真・映像に関する幅広い調査・研究	4
2 事業展開の評価 <質の高い写真・映像文化と出会う美術館>		4
(1)	来館者数の目標達成と集客増	5
(2)	質的な満足を得られる展覧会の提供	5
(3)	良質な映画の誘致と上映	4
3 教育・普及事業の評価 <写真・映像文化の普及と新たな創造を支援する美術館>		5
(1)	対象者に応じた多様なプログラムの提供	5
(2)	図書・情報の収集と公開の促進	4
4 広報事業・情報発信の評価 <写真・映像文化の拠点として貢献する美術館>		4
(1)	効果的な広報・宣伝	4
(2)	インターネット等を用いた情報発信の推進	3
5 来館者の視点、企業・団体の参加、ボランティア事業、地域連携の評価 <開かれた美術館>		4
(1)	良質なサービスの企画、提供	4
(2)	企業・団体の参加促進	5
(3)	ボランティアの参画推進	4
(4)	地域との連携強化	4
6 インフラの改善 <ミッション達成のための必要な基盤の整備>		4

※評点区分：【高】5 【やや高】4 【中】3 【やや低】2 【低】1

平成26年度事業評価結果一覧

1 作品収集・保存事業の評価 【評点5】 <過去から現在に至る写真・映像文化を未来に継承する美術館>

(1) 優れた写真・映像作品の計画的・効果的な収集 【評点4】

《評価の理由》

- 2「黎明期の写真収集」、3「歴史的作家収集」、5「若手作家収集」、7「40、50、60代作家から重点作家を選ぶ」という4項目は、一見「全部を収集する」という総花的な印象を与えるが、31頁の「収蔵作品の紹介」に一部挙げられている作品を見ると、選択が上記の各指針をきちんと意識して行われており、ミニ写真史のように感じられる。
- 指針に基づいて国内外の良質の作品を収集していることは、美術館の基本的な活動として高く評価できる。
- 新規重点作家・佐藤時啓など展覧会と連動した効果的な収集が行われている。佐藤時啓は平成26年度（第65回）芸術選奨文部科学大臣賞及び第31回写真の町東川賞国内作家賞を受賞、その質の高さをよく表している。
 また、歴史的に貴重な写真も収集されており、写真の総合的専門美術館の使命を意識した収集が行われている。

《指摘された課題・提言等》

- 収集における「重点作家」の計38名については、必ずしも収集成果があがっているとは言えない。これは主には、マーケットの事情に左右された結果と思われるので、直ちに収集努力の不足とは言い難い。しかし、こうした事情を考慮に入れてもなお、「重点作家」のリストや収集方針について「随時見直し」の必要が痛感される。近い将来の課題として、この点を視野に入れてほしい。

(2) 的確な作品管理 【評点5】

《評価の理由》

- 映像については、デジタル作品の保存に課題があるので、ぜひ、東京都写真美術館主導でよりよい保存方法を研究してほしい。
- 平素より、写真作品の保存環境には、国内でどこよりも注意が払われているように思う（保存箱の選定、パッシブインジケーターによる空気質の検査、最大年間累積照度の設定など）。26年度は改修工事のための作品移動もあったが、移動に伴うリスクを最小限に留める工夫がなされ、写真の総合専門美術館としての専門性を発揮した対応がなされたと思う。
- 作品の保存科学上の調査・研究は、現在の最前線に位置するものと評価される。
 また、大規模改修工事にもなって、収蔵作品の移送が行われたが、作品管理上の問題は起こらなかったように思われる。

《指摘された課題・提言等》

- 工事終了後における再度の移送にあっても、同様の細心の注意を払っていただくよう要望する。

(3) 写真・映像に関する幅広い調査・研究 【評点4】

《評価の理由》

- 調査研究とその成果の公表に関しては一定の評価を与えることができる。海外研修を行って外国の機関、研究者との交流、連携につながっているのも好ましい。
- 展覧会の図録執筆や紀要の執筆のみならず、他誌への寄稿、学会発表、写真関係の講演会やシンポジウムへの参加・発表、非常勤講師や専門性を活かして委員・審査員を務めるなど、日常的な館の仕事に留まらず、個々の学芸員の専門性を高める調査・研究活動に積極的に取り組んでいることは高く評価できる。
- 調査・研究の成果が、多様な方法で公表されているのは好ましい。そのなかでも高い水準を示す成果報告については、「紀要」に収録されることが望ましい。つまり、「紀要」はそのような方針で編集されて欲しいということでもある。「紀要」はえてしてお座なりの形式に陥りがちであるが、ミュージアムの研究・調査の公式の発信として信頼度の高いメディアとなるべきであろう。

《指摘された課題・提言等》

- 今後は図録と紀要の内容の充実を期待したいが、同時に英文論文や英文レジюмеを載せるなど、国際的な発信を目指してほしい。
- その際にはまた、外国語（英語）版を添付して、海外に発信することが、現下において必須である。

2 事業展開の評価 【評点 4】

＜質の高い写真・映像文化と出会う美術館＞

(1) 来館者数の目標達成と集客増 【評点 5】

《評価の理由》

- 休館間際というと普通何となくうら寂しい感じになるものだが、最後まで沢山の展覧会で盛り上がっていたという印象がある。その結果、予定より来館者数も上回ったようで何よりである。開館時には、これを上回る賑わいを期待したい。
- 来館者数の目標を達成できており、年代別のバランスも良い。

《指摘された課題・提言等》

- 今後は、若年層のみならず外国人観光客の取り込みも意識したい。
- 実験劇場のイベント開催数が時期によってさまざまなので、結果として観覧者数にも影響が及んでいる。この部分については、努力の方向を見直す必要があるだろう。

(2) 質的な満足を得られる展覧会の提供 【評点 5】

《評価の理由》

《指摘された課題・提言等》

- 当該期間内には、収蔵展と自主企画展として6件の展覧会が開催されたが、いずれも十分な準備がほどこされ、所期の目標を達成したと思われる。「下岡蓮杖」展では、新資料の発掘もあって、日本写真史の先駆者の多様な側面が明るみに出るなど、きわめて興味深かった。それらは、狭く写真史というよりも、明治初年の日本近代文化史全般とも関わりあうものであり、写真美としての力量を示したものと言ってよかろう。

「黒部と槍」展は山岳写真の開拓者の作品を集中的に展示して、日本の近代がもたらした新しい自然観の重要な一側面を開示することになったと評価する。

「佐藤時啓」展は、当館の「新規重点作家」に関わるものであり、重点的な収集・調査の結果が開示されている。公的表彰に浴するなど、写真展としての水準を示すものとなった。

「岡村昭彦」展は、調査・研究をもあわせて周到な準備のうえで開催されており、被写体のリアルさもあって、社会的関心を引き起こした。図録が一般書籍として流通しえたのも、このためであろう。

《指摘された課題・提言等》

- 今後は写真と他の芸術ジャンルとのコラボレーションなど、これまでの枠を超えるような展覧会も期待したい。

(3) 良質な映画の誘致と上映 【評点 4】

《評価の理由》

- 誘致された映画はいずれも「アート&ヒューマン」のコンセプトに合致し、質の高いものであった。「僕がジョンと呼ばれるまで」は現代社会の問題をヒューマニティ

をもって取り扱っており、〈山岳映画 特集上映〉は展覧会との連携ということで有意義であった。そのほか「世界一美しい本を作る男―シュタイデルとの旅」や「華いのち 中川幸夫」など「アート&ヒューマン」のコンセプトはどの作品にも活かされていたと思われる。

- 当期については、特に「山岳映画特集」が注目される。20世紀初頭に遡る作品から現在まで、都合16点の作品が上映された。国の内外にわたっており、また作品の性格もきわめて多様であった。一般のレンタルフィルムではカバーできないものも多く、斬新で有意義な企画となったようである。写真と映像とのコラボレーションが望ましい形で展開するものであり、今後の方向性を示唆する試みとして高く評価する。

〈指摘された課題・提言等〉

- 「黒部と槍」展は、山岳映画上映と抱き合わせのように、難しいかもしれないが、展覧会と映画の関係が有機的だと来館者もより一層興味をひくだろう。

3 教育・普及事業の評価 【評点 5】

＜写真・映像文化の普及と新たな創造を支援する美術館＞

(1) 対象者に応じて多様なプログラムの提供 【評点 5】

《評価の理由》

- 当館の観客の特徴は、年齢、性別などの幅が著しく大きいことにある。このため普及・教育も、対象に配慮した多様な対応を必要としている。それだけに、需要の量と質の測りとりにも工夫が求められよう。その配慮については、かなりの評価をしたい。ことに、恵比寿映像祭に際して提供したプログラムはバラエティに富んでおり、需要によく応えたものといえる。また、スクールプログラムにおけるフォトグラムやモノクロの銀塩プリントの現像体験は、かつての時代の写真体験をもため世代の青少年にとっては、物珍しいばかりか写真の原点を指し示すことの意味も大きく、教育プログラムとして有用であろう。
- スクールプログラム、ワークショップ、講演会、ギャラリー・トークなど教育普及活動に熱心であることは、次世代の観客の育成という側面も含めて大いに評価できる。

《指摘された課題・提言等》

- スクールプログラムを受ける学校が固定化するのはいかがなものか。いろいろな学校に参加して欲しい。

(2) 図書・情報の収集と公開の促進 【評点 4】

《評価の理由》

- 写真専門の図書室として収蔵冊数をさらに増やしてほしい。一般のみならず、研究者にも活用できる水準の高い図書室を目指すことを希望する。
- クラウド版の図書システム導入は、インターネット上で雑誌の検索も可能になり評価できる。

《指摘された課題・提言等》

- 9月24日からの改修工事に伴う休館は、写真に関する質の高い情報をきちんと提供できる図書室が利用できなくなるので、利用者にとっては痛手であろうが、いたしかたないと思われる。
- 休館中に写真映像に関する図書資料の整理保存がどこまで出来るかが課題である。
- 当面は工事による休館の期間を利用して、遡及入力のパースを速めることが可能であろう。

4 広報事業・情報発信の評価 【評点4】 <写真・映像文化の拠点として貢献する美術館>

(1) 効果的な広報・宣伝 【評点4】

≪評価の理由≫

- 従来型広報誌「写真美術館ニュース eyes (アイズ)」、より広範な読者層に訴える広報誌別冊「nya-eyes (ニャイズ)」、プレスリリースの発送と記者懇談会やプレス向けツアーの実施など、ポスター、チラシの配布や建物の壁面を利用した掲出以外にも様々な広報を、明確な対象を想定し、効果的に展開している。
- 26年度は改修工事で休館することも広報の重要な一環と捉え、クロージングイベントを行ったのは大いに評価に値すると思う。

年代的にも、全国で改修工事等で休館する美術館が続出する時期だが、クロージングイベントを実施する館はあまり無いように思われる。様々な創意工夫によって効果的に広報を展開していることがよくわかる。

≪指摘された課題・提言等≫

- 恵比寿映像祭は、街なかで旗や幟を目立つところにたくさん立てられると祝祭感が増し、「祭」らしくなるだろう。
 - 広義の広報活動のうちことに注目されるのは、周年史の編集が進行していることである。周年史は、さまざまな意味で極めて重要であり、全職員が注力して相応しい作品に仕上げていただきたい。
- ことに折しも休館中ということもあり、立ち止まって過去を省察し、将来にむけて整理をおこなう絶好の機会でもあることから、健闘を祈りたい。

(2) インターネット等を用いた情報発信の推進 【評点3】

≪評価の理由≫

- 本美術館のホームページはそれなりに努力しているとは思いますが、内容、デザインともに改善の余地があると思われる。

特に、コレクション検索の充実は単なる情報発信以前の問題であると思っている。東京都写真美術館は、日本におけるこの分野の leading museum であるからこそ厳しい注文をするが、全収蔵作品の戸籍をきちんと作って公表するという基礎作業がおろそかになっているのではないかと。

著作権の切れた画像も多くあるのに、文字データだけで画像が添付されていないのは致命的で、リニューアル期間中にぜひともその作業に力を注いでもらいたいし、リニューアル後も著作権を取得しながら画像の添付を進めてもらいたい。

外からは見えにくいですが、こうした地味な作業こそが美術館の信用を下支えすると考える。作品の基本データと画像を合わせてHPで見ることができれば、コレクションの存在を広く知らしめることにもなり、研究者にとっても大いに裨益するであろう。

- インターネットなどを用いた広報はCINRA.NETなどを活用した広報展開がなされていた。ネットを媒体とした広報展開はまだまだ開拓の余地はあると思われるし、写真・映像の観客にとっては広報媒体としては有効と思われる。とりあえずCINRA.NETはサイトとしては良質で手堅い媒体と思われるが、今後さらなる

NET 広報媒体の拡充を図っていくことも考えて行けばよいのではないかとと思われる。

《指摘された課題・提言等》

- 英語版には最低限の情報しかなく、これを拡充することが今後の大きな課題であろう。これは、外国人観客の増大にもつながる問題である。
- 収蔵品検索の画面で作家名を入力する欄で、「姓と名」の間に半角の空白を入れてください」などの注釈があったほうが良いように思った。せっかくの休館期間なので、きめの細かいサイトにしてほしい。

5 来館者の視点、企業・団体の参加、ボランティア事業、地域連携の評価 〈開かれた美術館〉 【評点4】

(1) 良質なサービスの企画・提供 【評点4】

《評価の理由》

- 良質なサービスとは何かということに帰着するが、とりあえず施設的なものや、スタッフの対応、ミュージアムショップやカフェなどを総合的に考えると、現状では「中」という評価となった。リニューアル・オープン後にさらなる期待をしたいと思う。
- 展覧会やイベントのみならず、図書室、カフェ、ショップにいたるまで、来館者に対してサービスを提供するという意識が徹底しているのは好ましい。来館者のアンケート調査も実施し、その意見を改善に結びつけているのも評価できる。

《指摘された課題・提言等》

- 今回の大改修によって写美をつい入ってみたくなるような場所にするためには、ひとえに駅側から来る人々の目を引き、入りやすいようにすることだと思う。女性にとっては、カフェ、ショップ以外に、荷物置きやエアタオルなど化粧室もポイント。
- 旧来の友の会は、休館に伴い解散されている。再度の開館に当たって復活するものと思われるが、その際には従来の方の活動の評価を行ったうえで、再配置を試みてほしい。

従来、1000名程度の有料会員からなっていたが、提供サービスの再点検を含む見直しが必要であろう。友の会内覧会が、参加者数50名程度と低調であったことなどを反省材料にして、進化のための方向性を探ることも必要であろう。

(2) 企業・団体等の参加促進 【評点5】

《評価の理由》

- 支援会員に写真関連、印刷関連等、写美の性格と関連深い企業・団体がベースとしてあるのが心強い。
また、日大芸術学部など支援会員としては珍しい大学関係が入っているなどいいのではなかろうか。こうした特徴的な傾向を保持したまま、一般会員が増加して行くとなお良いであろう。
- 支援会員の制度が機能していて、美術館の活動に財政面で寄与している。

《指摘された課題・提言等》

- 従来、この部分はきわめて良好な結果を残してきた。休館中の現在でも満足すべき状態であるが、休館を理由として支援会員辞退の動きが起きないように、適切なケアを行うことが必要であろう。

(3) ボランティアの参画促進 【評点4】

《評価の理由》

- 写美の場合、多様なボランティアが必要とされるだろう。特殊な技術に精通している人から、子ども相手に簡単なカメラを作る人まで写美のボランティアに応募する

人は写真の好きな人だろうから、その気持ちが若い人、若い人に伝わってゆくとよいと願っている。また屋外催しの施設設置、安全管理なども、若いボランティアにとっては将来の仕事における技術や責任感を養う機会になるであろうから、管理に気をつけながら大いにやっていただきたい。

- ボランティアの登録者数は、休館に入ることもあり、募集を行わなかったため新規登録はなかったが、活動自体は休館中もスクールプログラムの学校訪問や「恵比寿映像祭」会場スタッフなど、中身の濃いものになったようだ。とはいえ、今年度の活動は休館の年ということで出来る範囲でという観があり、「中」という評価とさせていただいた。

《指摘された課題・提言等》

- 休館中は、この現状維持で致し方ないが、もっと多方面でのボランティア活動を考える必要あり。
- 休館に伴い、ボランティアの新規登録がゼロとなっているが、休館とは無関係にも従事すべき活動は存在するので、この際その幅広さを背景として、ボランティア活動の意義の再認識に向かってほしい。

(4) 地域との連携強化 【評点4】

《評価の理由》

- 恵比寿映像祭で地域連携が強化されたのは、高く評価できる。美術館を核に恵比寿を「写真と映像のまち」にするくらいの勢いがあってもいいかもしれない。
- 今年度は休館中ということで恵比寿近郊の美術館外施設を使って開催した「第7回恵比寿映像祭」を評価したい。

もちろん施設的に不十分なところもあったかもしれないが、この機会に周辺の施設を使った事業展開を行ったことは、地域に写真美術館の存在を意識させ、連携を強化することに役立ったのではないかとと思われる。

《指摘された課題・提言等》

- 2020年オリンピック・パラリンピックを視野におさめた、地域連携活動の活発化の動きは、時宜にかなったものである。今後、さまざまな分野でこの活動が進展する見通しなので、とくに外国人観客の誘致サービスなどをターゲットに、地域連携をめざしてほしい。

6. インフラの改善 【評点4】
＜ミッション達成のための必要な基盤の整備＞

《評価の理由》

- まず、改修工事を行うことを評価したい。改修内容も様々な検討がおこなわれたようであるので、リニューアル・オープン後にその成果を見るのが楽しみである。
- 一度大規模改修が済めば次の機会は遠い。くれぐれも関わるすべての人々が当事者意識をもって、学芸の仕事の施設だけではなく、公共の施設のの一つ一つの計画について慎重かつ大胆な案を練り上げていただきたい。

公共の空間については、ぜひ美意識重視でお願いしたい。それは飾り立てるということではなく、空間そのものの美しい使い方ということである。当初毀誉褒貶があった建物自体、年月が経って味が出始めているので、それを抜群のセンスで生かして頂きたい。

《指摘された課題・提言等》

- 現在進行中の大規模改修は、インフラの根本的な改善につながるものと確信している。予算・時期などの制約もあろうが、この機会を逸すると次の機会を長らくにわたって待つことにもなるので、関連部署との交渉もふくめて、最後まで万端怠りなきよう手配をお願いしたい。

資 料

東京都写真美術館外部評価委員会設置要綱

（設 置）

第1 東京都写真美術館（以下「美術館」という。）の事業実績を客観的に評価し、事業 効果を適正に測るとともに、改善事項の検討を進めるため、館長の私的諮問機関として東京都写真美術館外部評価委員会（以下「評価委員会」という。）を設置する。

（所掌事項）

第2 評価委員会は、次の事項について審議し館長に助言を行う。

- （1）美術館が掲げる定性目標、定量目標に基づく美術館事業の外部評価報告書に関すること。
- （2）その他、館長が必要と認めた事項に関すること

（構 成）

第3 評価委員会は、学識経験等を有する者の中から、館長が依頼する委員7人以内で構成する。

（任 期）

第4 委員の任期は、3年とし、再任を妨げない。

（座長及び副座長）

第5 評価委員会に、座長及び副座長を置く。

- 2 座長及び副座長は、委員の互選により定める。
- 3 座長は、委員会を主宰し、会務を総理する。
- 4 副座長は、座長を補佐し、座長に事故があるときには、その職務を代理する。

（招 集）

第6 評価委員会は、館長が招集する。

- 2 館長は、必要に応じて、委員以外の関係者の出席を求めることができる。

（庶 務）

第7 評価委員会の庶務は、東京都写真美術館管理課において処理する。

（補 則）

第8 この要綱に定めるもののほか、評価委員会に必要な事項は、館長が定める。

附 則

この要綱は、平成16年4月1日から施行する。

東京都写真美術館外部評価委員会委員名簿

	氏 名	職 業 ・ 役 職	備 考
座 長	樺山 紘一	印刷博物館 館長	博物館長
副座長	鈴木杜幾子	明治学院大学文学部芸術学科 名誉教授	美術館・博物館 経営研究者
	三浦 篤	東京大学大学院総合文化研究科 教授	
	清水 真砂	世田谷美術館 学芸部長	美術館・博物館 関係有識者
	小川 敦生	多摩美術大学 美術学部 芸術学科 教授 (元日本経済新聞社文化部記者)	マスコミ・文化関係者
	矢野 富子	東京都写真美術館ボランティア	ボランティア

(敬称略:順不同)